

道徳教育・道徳科の基礎・基本を学びたい、授業改善を図りたい

I	道徳教育の基礎・基本	
(1)	学校段階に応じた道徳教育	1
①	道徳教育のねらい	1
②	道徳性	1
③	道徳教育の進め方	2
(2)	小・中学校における道徳教育	3
①	道徳教育の内容	3
ア	四つの視点	3
イ	指導内容の重点化	3
②	道徳教育と道徳科の関係	4
③	道徳教育の要としての道徳科	7
ア	道徳科の目標	7
イ	道徳科の特質	7
ウ	道徳科の学習	7
④	道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の実現	9
ア	「主体的な学び」の視点	9
イ	「対話的な学び」の視点	11
ウ	「深い学び」の視点	15
⑤	道徳科における評価	18
ア	道徳科における児童生徒の学習状況及び 成長の様子についての評価	18
イ	道徳科の授業に対する評価	21
(3)	高等学校における道徳教育	23
①	道徳教育の目標	23
②	道徳教育の指導体制	23
③	道徳教育の全体計画	23



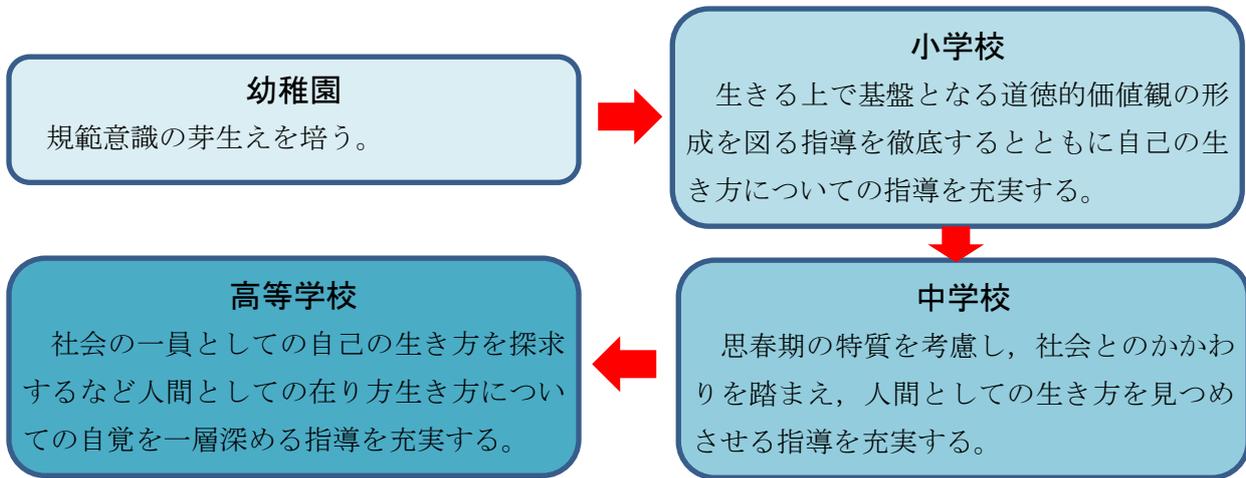
一人一人が
自分事として真剣に考え、
友達と議論し、
深まっていくような
そんな授業を目指しましょう!



1 道徳教育の基礎・基本

(1) 学校段階に応じた道徳教育

道徳教育はすべての学校段階において一貫して取り組むべきものであり、幼稚園、小・中・高等学校の学校段階や小学校の低・中・高学年の各学年段階ごとにその重点を明確にし、より効果的な指導が行われるようにすることが必要です。



① 道徳教育のねらい

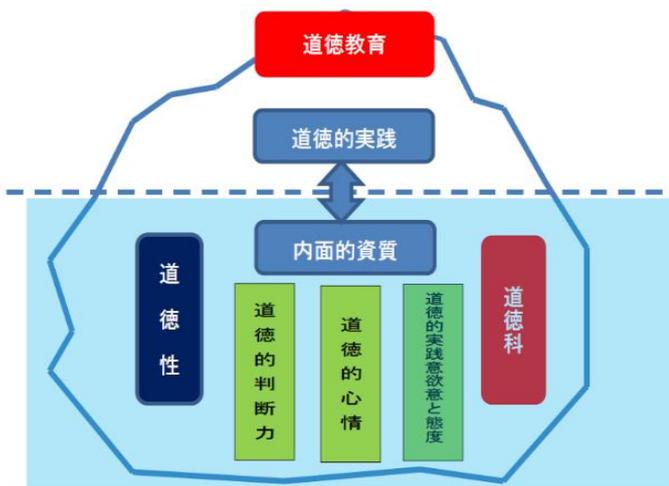
学校における道徳教育は、児童生徒がよりよく生きるための基盤となる**道徳性を養う**ことを目標としており、児童生徒一人一人が将来に対する夢や希望、自らの人生や未来を拓いていく力を育む源となるものでなければならない。

道徳教育を通じて育成される道徳性は、「豊かな心」はもちろん、「確かな学力」や「健やかな体」の基盤ともなり、児童生徒の「生きる力」を根本で支えるものです。



② 道徳性

道徳性は、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を諸様相とします。これらの諸様相は、序列や段階があるということではなく、日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況で、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができる内面的資質のことです。



道徳性は、徐々に、しかも着実に養われることによって、潜在的、持続的な作用を行為や人格に及ぼすものであるだけに、長期的展望と綿密な計画に基づいた丹念な指導がなされ、道徳的実践につなげていくことができるようにすることが求められます。



ここがポイント！

○ 道徳的判断力

人間として生きるために道徳的価値が大切なことを理解し、様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力。

○ 道徳的心情

道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情のこと。

○ 道徳的実践意欲と態度

道徳的心情や道徳的判断力によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性。

- ・道徳的実践意欲は、道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働き。
- ・道徳的態度は、道徳的判断力や道徳的心情に裏付けられた道徳的行為への身構え。

③ 道徳教育の進め方

学校における道徳教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動であり、社会の変化に対応しその形成者として生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。

小・中学校…道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、(外国語活動 ※小学校のみ)、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。

高等学校…公民科の「公共」及び「倫理」並びに特別活動を中核的な指導場面として各教科・科目等の特質に応じ学校の教育活動全体を通じて、生徒が人間としての在り方生き方を主体的に探求し豊かな自己形成ができるよう、適切な指導を行う。

道徳科の指導は、児童生徒の行為の変容を直接的にねらいとするものではありません。教師の一方的な押し付けや単なる生活経験の話合いなどに終始することのないように留意しましょう。



高等学校の道徳教育は、小・中学校と異なり道徳科が設けられていないので、小・中学校における道徳教育を踏まえつつ、教育活動全体を通じて指導するための配慮が必要です。

(2) 小・中学校における道德教育

① 道德教育の内容

ア 四つの視点

道德教育の内容については、小・中学校の各学年・学校段階において四つの視点に分けた内容項目として示されています。この四つの視点は、相互に深い関連をもっており、各学年・学校段階において、関連を考慮しながら、四つの視点に含まれるすべての内容項目について、学校の教育活動全体を通じて適切に指導していくことが大切です。

A
の
視
点

主として自分自身に関すること
○善悪の判断, 自律, 自由と責任
○節度, 節制 ○個性の伸長
○真理の探究 など

B
の
視
点

主として人との関わりに関すること
○親切, 思いやり ○感謝
○礼儀 ○友情, 信頼
○相互理解, 寛容

C
の
視
点

主として集団や社会との関わりに関すること
○規則の尊重 ○公正, 公平, 社会正義
○勤労, 公共の精神 ○家族愛
○国際理解, 国際親善 など

D
の
視
点

主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関すること
○生命の尊さ ○自然愛護
○感動, 畏敬の念
○よりよく生きる喜び

イ 指導内容の重点化

道德教育を進めるに当たっては、児童生徒の発達の段階や特性等を踏まえるとともに、学校、地域等の実態や課題に応じて、学校全体及び各学年段階の指導内容ごとの重点化を図ることが大切です。

四つの視点の順序が児童生徒の対象の広がりによって改善されました。また、それぞれの内容項目に手掛かりとなる「友情, 信頼」「生命の尊さ」などの言葉がキーワードとして付記されました。社会的な要請や今日的課題を考慮し、次のような内容の指導について配慮が求められています。



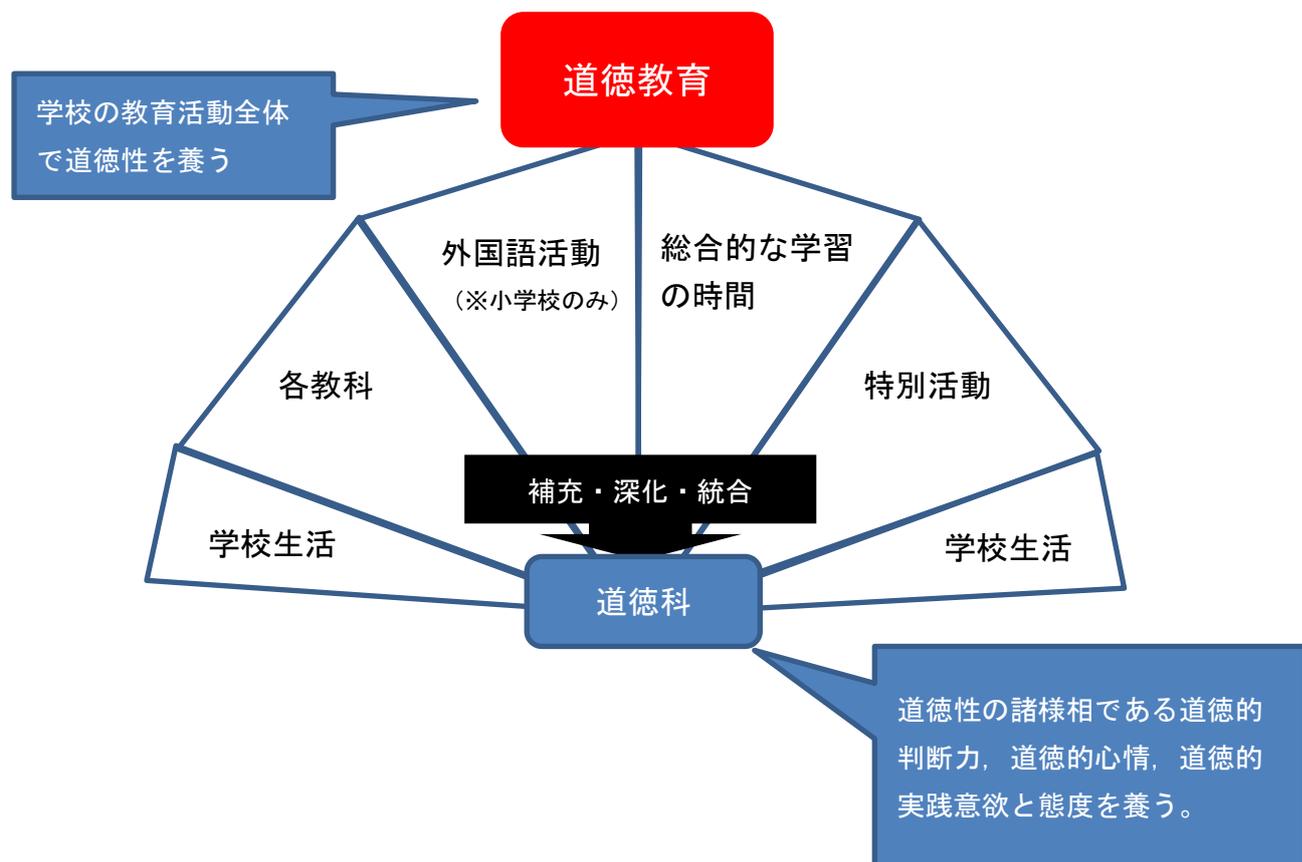
小学校	全	・自立心や自律性 ・生命を尊重する心 ・他者を思いやる心
	低	・挨拶などの基本的な生活習慣を身に付ける ・善悪を判断し、してはならないことをしない ・社会生活上のきまりを守る
	中	・善悪を判断し、正しいと判断したことを行う ・身近な人々と協力し助け合う ・集団や社会のきまりを守る
	高	・相手の考え方や立場を理解して支え合う ・法やきまりの意義を理解して進んで守る ・集団生活の充実に努める ・伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重する
中学校		・自立心や自律性を高め、規律ある生活をする ・生命を尊重する心や自らの弱さを克服して気高く生きようとする心を育てる ・法やきまりの意義に関する理解を深める ・自らの将来の生き方を考え主体的に社会の形成に参画する意欲と態度を養う ・伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重する ・国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付ける

ここがポイント!

- 重点内容については、指導時数を増やしたり、他の教育活動との関連を図った道德学習プログラムにしたりするなどの工夫をしましょう。
- 内容項目を児童生徒の立場から具体的に捉えるために「私たちの道德」を活用しましょう。

② 道徳教育と道徳科の関係

道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて、道徳性を養うことを目標としています。道徳科は、道徳教育で捉えた道徳的諸価値を補充、深化、統合する計画的・発展的な学習により、道徳性の諸様相である、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を育成する要となる時間として位置付くものです。



各教科等は、それぞれに固有の目標をもっていますので、それらの指導の中で行う道徳教育としては、取り扱う機会が十分でない道徳的価値に関わる指導を補うこと（補充）や、児童生徒や学校の実態等を踏まえて指導をより一層深めること（深化）、相互の関連を捉え直したり発展させたりする（統合）道徳科がどうしても必要になってくるのです。



ここがポイント！

- 道徳科は、扇の「要」のように、各教育活動における道徳教育の要所を押さえて中心で留めるような役割をもっています。
- 道徳性を育むために、道徳科はもとより、各教科、外国語活動（小学校のみ）、総合的な学習の時間及び特別活動においてもそれぞれの特質に応じて適切な指導を行いましょう。

「道徳学習プログラム」の実践事例 ※小学校第2学年の例

【プログラム作成の留意点】

プログラムのねらいを明確にする。

児童の意識の流れを中心に計画する。

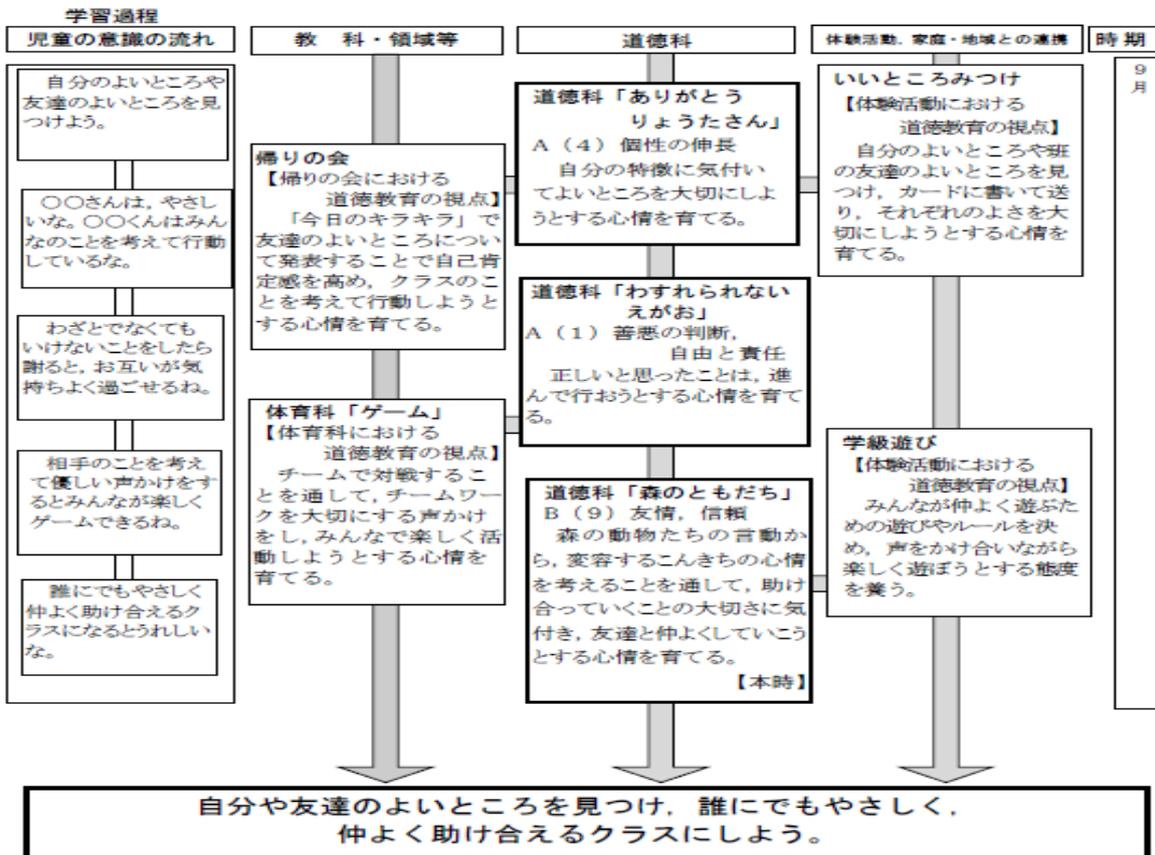
各教科・領域、体験活動や家庭・地域とのつながりを明確にする。

内容項目間の関連を考慮する。

道徳学習シートを活用することで、ねらいを児童と共有しながら学習を進める。

第2学年 道徳科学習プログラム
みんなに やさしい クラスになあれ！

ねらい 自分や友達のよさや特徴に気づき、友だちにやさしく接し、仲よく助け合おうとする態度を養う。



【作成の意図と作成上のポイント】

- カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れ、児童の思考の流れを中心に、「道徳科の指導内容」と「日常の体験」をつなぐことを意図したカリキュラム・デザインを行うことで、児童が目的意識をもち、連続的に学び続けることができます。
- 道徳科学習プログラムの全体が見える化した「道徳学習シート」を作成し、活用することで、児童とねらいを共有しながら学習を進めることができます。
- 意図的に体験活動等を仕組むことで共通体験をもたせ、その体験を語ることで思いを共有し、道徳的価値についての理解を深めたり、広げたりすることができます。
- 年間指導計画の中に位置付け、一ヶ月ぐらいのスパンで意図的、計画的に行うことで、組んだ体験活動等の想起がしやすくなります。

道徳的行為に関する体験的な活動（例）



総合的な学習の時間 福祉ボランティア体験

〈ねらい〉

福祉やボランティアについての講話や体験活動を通して、福祉に関する意義を理解し、自分達もできることを積極的に行おうとする意欲を育てる。

【重点内容項目：C 社会参画，公共の精神・勤労】

スロープの下りはスピードを落とすのに苦労した。ボランティアは相手の立場に立って考えることが大切だと感じた。

小さな段差でも、車いすに乗っていると衝撃を感じて怖いと思った。

道徳科 「たんぽぽ作業所」



生徒の意識の流れ	各教科・領域と道徳科との関連	時期
社会福祉には、どのようなものがあるかわかった。	総合的な学習の時間「ボランティア体験」【総合における道徳教育の視点】 福祉やボランティアについての講話や体験活動を通して、福祉に対する意義を理解し、自分たちもできることを積極的に行おうとする意欲を育てる。	9月
人間には、幸せに生きる権利があると同時に、他者の権利を尊重するための責任や義務があることがわかった。	道徳科 「加山さんの願い」 C(12) 社会参画、公共の精神 勤労や奉仕を通して社会に貢献するということを自覚し、充実した生き方を追求し実現していくことが一人一人の生きがいのある人生につながることに気付く。	10月
人のために何かをすることは、自分の生きがいにつながっていくものだなあ。	社会科（公民的分野） 単元名 人間の尊重と日本国憲法 【社会科における道徳教育の視点】 国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚を持ち、自他の人権を尊重し、社会的義務や責任を重んじ、公正に判断しようとする態度や能力、また自由・権利と責任・義務との関係を正しく認識し、権利・義務の主体者として後世に判断しようとするなどの公民的資質を養う	11月
だれかのために役立とうという気持ちをもって仕事をしている人が社会を支えている。	道徳科 「社会からの無言の賛賞を感じる感性」 C(12) 社会参画、公共の精神 社会参画と社会の一員としての自覚を深め、進んで社会の発展のために努力しようとする態度を養う。	12月
苦勞が報われたり、人のために役立ったりする時に、人は働く喜びを感じるのだなあ。	道徳科 「たんぽぽ作業所」 C(13) 勤勞 働くことの厳しさを理解しながらも、働くことの尊さや理解し、勤勞を通じて社会の発展に尽くそうとする態度を養う。	1月
主体的に社会に関わることの意義について理解し、公共の精神をもって誰もが安心して生活できる社会を築いていこう。		

道徳学習プログラム

道徳学習プログラム作成上の留意点

- (1) プログラムのねらいを明確にする。
※目指す姿、重点内容項目等
- (2) 生徒の意識の流れを想定しながら、プログラムを作成する。
- (3) 外部講師と打ち合わせの時間をしっかりととって、ねらいがぶれないように心がける。
- (4) 各教科等の単元の実施時期と合わせたプログラムを作成する。

- ・働くことは、人の役に立てる喜びを感じるためにやるのが一番の目的なのだと感じる事ができた。お金が第一でないことに驚いた。
- ・働くことはお金がもらえるということではなく、人の役に立つことが一番大事。
- ・「他人の役に立つ」ということが働くことの喜びにつながっていると知ることができた。
- ・将来、自分も多くの人の役に立てる人間になりたいと思った。

③ 道德教育の要としての道德科

ア 道德科の目標

道德教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え（※中学校では、下線部が“物事を広い視野から”となる）、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、（※中学校では、下線部が“人間としての生き方”となる）道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

イ 道德科の特質

児童生徒一人一人が、ねらいに含まれる一定の道德的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道德性を主体的に養っていく時間である。

※（ ）は中学校

ウ 道德科の学習

道德科では、目標に、道德性を養うための学習活動がより具体化して示されました。特に、学習活動として示された、次の四つの事柄を押さえておく必要があります。



○ 道德的諸価値について理解する

道德的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。道德的価値が人間らしさを表すものであることに気付き、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深めていくようにする。

価値理解…内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解する。

人間理解…道德的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解する。

他者理解…道德的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということ为前提として理解する。

○ 自己を見つめる

様々な道德的価値について、自分との関わり、つまりこれまでの自分の経験やそのときの考え方、感じ方と照らし合わせながら、更に考えを深めていくようにする。

○ 物事を（広い視野から）多面的・多角的に考える

児童生徒が多様な考え方や感じ方に接することが大切であり、多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えられるようにする。

○ 自己（人間として）の生き方について考えを深める

児童生徒は、道德的価値の理解を基に自己を見つめるなどの道德的価値の自覚を深める過程で、同時に自己の生き方についての考えを深めているが、特にそのことを強く意識させることが重要である。

ここがポイント！

- 道德科は、児童生徒がねらいとする道德的価値を自己との関わりにおいて捉えることができるように指導方法の工夫に努めましょう。
- 道德科の学習を効果的に行うためには、学級内での信頼関係の構築が基盤となります。教員と児童生徒の信頼関係や児童生徒相互の人間関係を育て、一人一人が自分の考え方や感じ方を伸び伸びと表現することができる雰囲気や日常の学級経営の中でつくるようにすることが大切です。

道徳教育と道徳科の関係や指導の方向性を整理し、校内で共有している例

【〇〇学校 道徳科の考え方】

道徳教育の目標 道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。

道徳教育の展開と道徳科 学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと。

道徳科の目標 道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

道徳性 道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳教育は道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を養うことを求めている。
 ①道徳的判断力 ②道徳的心情 ③道徳的実践意欲と態度 の育成

道徳科の指導

道徳性を養うために行う道徳科における学習

- (1) 道徳的諸価値について理解する
 - ① 道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。
 - ② 児童一人一人が道徳的価値観を形成する上で必要なものを内容項目として取り上げる。
 - ③ 道徳的価値の理解について
 - ・価値理解 ・人間理解 ・他者理解
- (2) 自己を見つめる
- (3) 物事を多面的・多角的に考える
- (4) 自己の生き方についての考えを深める

道徳科の特質を生かした学習指導の展開

ア 導入の工夫

導入は、主題に対する児童の興味や関心を高め、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる動機付けを図る段階



イ 展開前段・後段の工夫

展開前段・後段は、ねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な教材によって、児童一人一人が、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる段階



ウ 終末の工夫

終末は、ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につながる段階

道徳的価値を自分事として考えたり、感じたりすることのできる 〇〇の子



これまでの生き方の課題やどのような生き方をしたいかを考えることのできる 〇〇の子



自己を見つめ、これからの生き方について考えを深める 〇〇の子

道徳教育や道徳科の進め方や目標について、さらには、道徳科の指導の方向性について整理し、教職員間で共有しておくことは大切です。その際は、学習指導要領総則編や学習指導要領解説を参考に、自校の児童生徒の実態や地域の実態を踏まえ、整理してみましょう。



④ 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の実現

道徳教育において「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」を実現することが、「主体的・対話的で深い学び」を実現することになる。

【「主体的・対話的で深い学び」の視点から求められること】

<p>「主体的な学び」の視点</p>	<p>児童生徒が問題意識をもち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習とすることや、各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。</p>
<p>「対話的な学び」の視点</p>	<p>子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすること。</p>
<p>「深い学び」の視点</p>	<p>道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とすること。</p>

ア 「主体的な学び」の視点

児童生徒が、問題意識をもつこと、自分事として考えること、自らを振り返ることなどを意識して授業づくりをしましょう。また、読み物教材の登場人物の心情理解のみに終始しないように心がけましょう。



【問題意識をもたせるための指導方法の工夫の実践事例】

子供たちにとって身近で切実な問題を扱った事例

【課題の提示】

導入において、生活の中で礼儀を意識している場面について想起させる中で、「礼儀に美しいや美しくないということがあるのだろうか。」「美しい礼儀とはどんなものだろう。」と発問し、生徒の日常生活をもとに問題意識をもたせ、課題を提示した。また、その後、「しぐさや礼が美しいとはどういうことなのだろう。」と再度発問し、本時の価値に迫った。



生徒の感想より

課題：美しい礼儀って？



授業の展開では、「日頃の礼儀」と「美しい礼儀」を役割演技により動作化させた。体験的にそれぞれの違いを実感させると同時に客観的に挨拶の様子を見ることで、問題意識を高めた。

今日の授業で、生活の中での礼儀は美しいものにできることが分かった。今は、「態度・気持ち・お互いに」という3つが全てそろった美しい礼儀をすることはすごく気を配らないとできないと思う。でも、これから美しい礼儀をすることに気を配って、毎日続けていければ、自然と身について、意識しなくてもできるようになれると思う。無意識で自然にそのようにできたら、美しいだけでなく、カッコいいとも思う。どんな場面でも美しく、カッコいい礼儀をするそんな人になりたいと思う。

【指導方法の工夫の意図と効果】

- 導入や展開の前段に児童生徒にとって身近な課題を提示することで、児童生徒に課題意識をもたせ、主体的に考えさせることができます。
- 児童生徒にとって身近な問題を取り上げることで、自分の経験や体験と重ね合わせ、自分事として考えさせることができます。

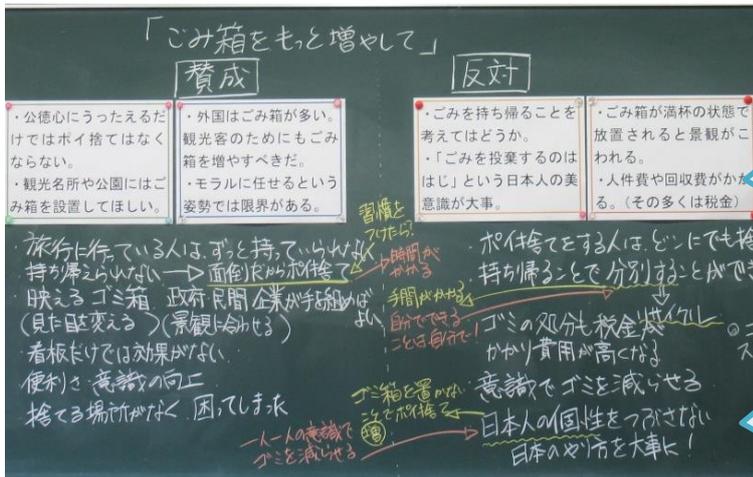
【実施する上でのポイント】

- 課題を提示する前には、導入においてその課題に関連したアンケートを提示するなどの工夫が考えられます。また、児童生徒の中に疑問が生まれたり、自分の経験を想起させたりするような発問の工夫をしてみましょう。
- 課題を提示した際は、中心発問や展開の終末で再度課題に戻ることで、思考を深めさせることができます。



教材の中に描かれている問題を扱った事例

第1学年 C 遵法精神、公德心「ごみ箱をもっと増やして」



教材文に示されている問いと意見を分類して示す。

【問題提起】
あなたはごみ箱を増やすことについてどう思いますか？

「街中にごみ箱を増やすべきか」という問いに対する様々な意見を掲載した教材です。教材文に示された意見を板書に整理した後、改めて生徒に問題提起をすることで、自分の生活経験からはなかなか想像しにくい問題についても具体的なイメージをもたせることができます。中心場面では、立場を明確にさせた上でディベートを行い、そこでの意見をもとに「誰もが気持ちよく過ごせる社会をつかっていくために大切なことは何だろう」という発問を行いました。これにより、立場が違っても共通する道徳的価値について考えを深めさせることができました。

賛成・ごみ箱がないからポイ捨てがおこる
・便利さが意識の向上に繋がる

反対・ポイ捨てをする人はどこでも捨てる
・意識すればごみは減らせる

共通して存在する
道徳的価値

公德心

「誰もが気持ちよく過ごせる社会をつかっていくために大切なことは？共通するものは？」

道徳科における問題とは道徳的価値に根差した問題であり、単なる日常での事象とは異なります。



イ 「対話的な学び」の視点

対話的な学びを通して、他者と対話したり、協働したりしながら、物事を一面的に捉えるのではなく、子供自らが、様々な視点から物事を理解できるようにしましょう。



【多面的・多角的に考えさせるための指導方法の工夫の実践事例】

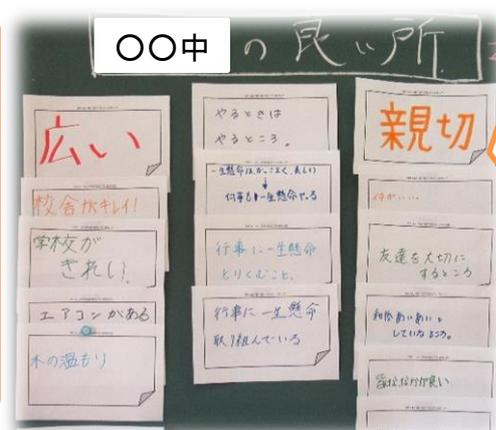
対話を促す指導方法の工夫例

(例) KJ法・A5用紙を用いた交流

付箋と模造紙を用いて生徒自身が自分たちの意見を整理していくことで、発言が苦手な児童生徒の意見も必ず反映されます。付箋の代わりにA5用紙、模造紙の代わりに黒板を活用すれば、グループ活動をしなくても、全体で同様の意見交流を行うことができます。



KJ法によるグループ活動



A5用紙を活用した意見交流

(例) p4c (philosophy for children「子どものための哲学」)を用いた交流

本時のテーマについて生徒自身が問いを立て、円形になって対話を進めていきます。自分たちが立てた問いに対して様々な考え方を交流する中で、個々の考えを深めていきましょう。「強制しない」「まとめない」がポイントです。



p4cのルール

- ①コミュニティボールを持っている人だけが話せる。
- ②意見を聞いてみたい相手やまだ発言していない人にボールを渡す。
- ③考えがうかばないときや話したくないときは、パスができる。

生徒が立てた問いの例

「世界平和を実現するためには？」
「進路を選択する上で大切なことは？」
「人間の命とはどんなものか？」

指導者は、基本的には対話に参加しないが、対話が円滑に進むよう活動を見守ったり、対話が停滞したりした時に新たな視点から問いを投げかけたりするなどの役割を担います。

ここがポイント！

- 「自分ならどうするか」という観点から道徳的価値と向き合うとともに、自分とは異なる意見をもつ他者と議論することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考えさせましょう。
- 他者との合意形成や具体的な解決策を得ること自体が目的ではなく、多面的・多角的な思考を通じて、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めさせましょう。

発問づくりの表と補助発問シートを使った工夫

発問づくりの表

発問の種類と発問の具体(例)

種類	発問例
「生き方」を問う	心情を問う ・〇〇は、～した時、どのようなことを思ったか。 ・この場面での〇〇は、どんな気持ちだったか。 ・〇〇は、心の中で、何と話しているか。
	行為を問う ・〇〇が～した(言った)のは、なぜだと思うか。 ・〇〇が、～した(言った)ことをどう思うか。 ・〇〇が～した(言った)のは、正しい判断と言えるのか。 ・〇〇は、この場面で、どう行動すべき(だった)か。
	子ども自身を問う ・自分が～の立場だったら、どうしていたか。 ・自分が～の立場なら、何と言うか。 ・自分がその立場なら、どのように思うか。
	道徳的価値を問う ・本当の友情とは、どのような関係だろう。 ・どんな時でも、～(親切に)しないとイケないのか。 ・どうすれば、～(広い心がもてるの)だろうか。
	教材を問う ・この話から、どんなことが大切だと感じたか。 ・〇〇の生き方から、どんなことを感じたか。 ・この話のどこが問題だと思うか。

・〇〇はどんなことを考えながら～して(言って)いるのか。
 ・どんな考え(気持ち)からそうした(言った)のか。
 ・〇〇は、これからどうすればよいと思うか。

・〇〇からどんなことを考えたり学んだりしたか。

具体的にもっと考えさせたいとき

- ・じゃあ～についてはどう？
- ・これについてはどうしたらよい？

- ・それは、どういうこと？
- ・別な言い方で・・・
- ・もっとくわしく・・・
- ・例をあげて・・・

- ・こういう別の考えもあるよ。
- ・だったら、どうする？

- ・なぜそう思うのか。
- ・自分はどちらの考えか。

問話の内容を	あらすじの順序を問う
	出来事を問う
	台詞や名前を問う



自分事として考えることができるための(補助)発問づくりの視点

視点	目的	発問例
立場の入れ替え	別の視点から考えさせる	・周りの人はどう思っているのだろう。 ・反対の立場だったらどうなるのだろう。
比較思考	複数のものを比較させる	・AとBのどちらの気持ちが強いのだろうか。 ・AとBはどんな違いがありますか。
範例的思考	主人公の行為や考えを手本や範例とさせる	・〇〇のよかったところはどんなところだろう。 ・どうしてこんなことができたのだろう。
批判的思考	主人公の行為や考えを批評させる	・また～かもしれないのに、なぜそう言ったのかな。 ・嫌なら手伝わなかったらよかったのに、なぜ～。 ・怒られたのになぜ言い返さないのかな。 ・なぜこのようなことになってしまったのか。
条件の変換	話の内容を意図的に変える	・もし、「〇〇」が～しなかったら、〇〇はどんな思いだったのだろうか。

学習指導過程

単元	学習活動	課題	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
導入	1. 「強い心」について考える。	課題 「強い心」とはどのような心だろうか。	・正しい心。 ・正しいとされる心。											
	2. 「サッカーボール」を眺め、「強い心」について話し合う。	課題 「強い心」とはどのような心だろうか。	・小さい男の子を心配しているところ。 ・小さい男の子に悪かったところ。 ・竹内君たちに腹を立てているところ。 ・竹内君たちに正しいと思うことを言おうとしているところ。											
	3. 「強い心」をもつためにはどうすればよいかを考える。	課題 「強い心」とはどのような心だろうか。	・いつでもよいことが悪いことを考える。 ・正しいことをしたい、勇たたりする。 ・勇気を出して正しいことを言う。											
	4. 指導者の説明を聞く。	課題 「強い心」とはどのような心だろうか。												

① 一番下の部分に本時のねらいを記入し、そこに向かって組み立てていくイメージをもつ。

補助発問作成シート

② 課題・中心発問・児童の反応はそのまま示す。

「道徳的諸価値について理解し」、「自己を見つめ」、「自己の人間としての生き方について考えを深める」発問・補助発問づくりの多面的・多角的に考えられる問い・道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問い

補助発問作成シート				
(課題)	「強い心」とはどのような心だろうか。			
2 中心発問	「ぼく」のよいところはどこでしょうか。			
3 児童の反応	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい男の子を心配しているところ。 ・小さい男の子に悪かったなと思っているところ。 ・竹内君たちに腹を立てているところ。 ・竹内君たちに正しいと思うことを言おうとしているところ。 			
4 発問づくり	自分で正しいことをよく考えて判断し、行動するには、「強い心」が必要である。			
5 補助発問	<table border="1"> <tr> <td>男の子はけがをしなかったのに、どうして「ぼく」は腹を立てているのでしょうか。(批判的思考)</td> <td>自分が「ぼく」の立場だったら同じように行動できたでしょうか。(子ども自身を問う)</td> <td>「ぼく」にはどのような「強い心」があるでしょうか。(範例的思考)</td> </tr> </table>	男の子はけがをしなかったのに、どうして「ぼく」は腹を立てているのでしょうか。(批判的思考)	自分が「ぼく」の立場だったら同じように行動できたでしょうか。(子ども自身を問う)	「ぼく」にはどのような「強い心」があるでしょうか。(範例的思考)
男の子はけがをしなかったのに、どうして「ぼく」は腹を立てているのでしょうか。(批判的思考)	自分が「ぼく」の立場だったら同じように行動できたでしょうか。(子ども自身を問う)	「ぼく」にはどのような「強い心」があるでしょうか。(範例的思考)		
6 児童の反応	<table border="1"> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールをぶつけてしまったのに、謝っていないから。 ・けがをしなかったからいいわけではないと思っている。 ・みんなが何も気にしていないから。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくだったらできないかも。 ・同じ学年の人になら言えると思う。 ・わたしは、いけないことはいけないと言う。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・よいことが悪いことを考える強い心。 ・正しいことをする強い心。 ・友達にも正しいことを言える強い心。 </td> </tr> </table>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールをぶつけてしまったのに、謝っていないから。 ・けがをしなかったからいいわけではないと思っている。 ・みんなが何も気にしていないから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくだったらできないかも。 ・同じ学年の人になら言えると思う。 ・わたしは、いけないことはいけないと言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・よいことが悪いことを考える強い心。 ・正しいことをする強い心。 ・友達にも正しいことを言える強い心。
<ul style="list-style-type: none"> ・ボールをぶつけてしまったのに、謝っていないから。 ・けがをしなかったからいいわけではないと思っている。 ・みんなが何も気にしていないから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくだったらできないかも。 ・同じ学年の人になら言えると思う。 ・わたしは、いけないことはいけないと言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・よいことが悪いことを考える強い心。 ・正しいことをする強い心。 ・友達にも正しいことを言える強い心。 		
1 本時のねらい	よいことや正しいと思うことは、自信をもって行おう。			

③ 中心発問の児童の反応を受けて気付かせたいことを検討し、明確にする。

④ 『発問づくりの表』を参考にして補助発問を検討し、児童の反応を予想する。
★ 期待する児童の反応も明記する！

最後に

⑤ 全体を再読し、補助発問を調整する。

実際の授業では、児童の思考の流れや実態に合わせて補助発問を選択する。(全て問う必要はない)

【発問を精選、実施の時のポイント】

- 発問は、人物の変容が見られるところや主題に関わるところを問います。発問づくりの表から選択したり、アレンジしたりしながら、教材の内容やねらいに合わせて発問や補助発問を決定していきます。特に、児童に気付かせたいことを絞った後、そのことに気付かせるための補助発問を複数用意しておいて、必要に応じて使っていくと効果的です。
- 発問や補助発問、切り返しを重ねることで、児童に多面的・多角的な考えを促すことにつながります。児童一人一人の道徳的価値の理解が深まったり広がったりすることでねらいに迫ることができます。



自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫(思考ツール等)



座標軸



ハートメジャー

児童生徒が自他の考えを比較して交流することができるように、自分の考えを視覚的に表現できる工夫(思考ツール等)をすることは効果的です。また、見えない心の中を可視化する板書の工夫により、黒板を見た子供たちの考えは、さらに深まっています。

ここがポイント！

- 思考ツールを活用し考えを可視化することで、考えを組み立てたり、整理したりしやすくなります。また、考えを表現(発表)することが苦手な児童生徒でも、自分の考えを表現できます。
 - 課題に応じて思考ツール(比較する【ベン図】、多面的・多角的に見る【Yチャート】、理由づける【クラゲチャート】等)を使い分けることで、目的に応じて、考えを友達と共有したり、自分の考えを深めたりしていくことができます。
- 最終的に児童生徒自ら、必要に応じて活用できるツールになっていくとよいですね。

指導に生かす具体的な多面的・多角的な見方の例として、

- ・ねらいとする道徳的価値の様々な面を考える。
- ・道徳的価値を支える様々な根拠を考える。
- ・様々な登場人物の立場で考える。
- ・焦点を絞って考えたり、視野を広げて考えたりする。
- ・時間の経過とともに変化する気持ちを考える。
- ・人間の強さや弱さ等を捉えて考える。 などがあります。



「多面的」に考えることと、「多角的」に考えることの違いは？

一般的には、「多面的」とは、学習対象が様々な面をもっていることを、「多角的」とは、学習対象を様々な角度から考察し理解することを意味しています。実際の指導にあたっては「多面的」と「多角的」は必ずしも明確に分けられるものではないため、道徳科の学習指導要領及び解説においては、「多面的・多角的に考え」とひとくくりに説明されています。



ウ 「深い学び」の視点

【質の高い多様な指導方法】

文部科学省の専門家会議において、道徳科の質の高い多様な指導方法の例示として次頁に示すとおり、「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」が挙げられています。

それぞれの特長は以下のとおりです。



読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習

教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、道徳的諸価値の理解を深めることについて効果的な指導方法であり、登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めることができる。

問題解決的な学習

児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。

問題場面について児童生徒自身の考えの根拠を問う発問や、問題場面を実際の自分に当てはめて考えてみることを促す発問、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせる発問などによって、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる。

道徳的行為に関する体験的な学習

役割演技などの体験的な学習を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することを通して、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。

問題場面を実際に体験してみることで、また、それに対して自分ならどのような行動をとるかという問題解決のための役割演技を通して、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる。

ここがポイント！

- 次頁に示した指導方法は例示に過ぎず、それぞれが独立した指導の「型」を示しているわけではありません。それぞれに様々な展開が考えられ、例えば読み物教材を活用しつつ問題解決的な学習を取り入れるなど、それぞれの要素を組み合わせた指導を行うことも考えられます。
- 重要なことは、指導する教員一人一人が、学習指導要領の改訂の趣旨をしっかりと把握し、学校の実態や児童生徒の実態を踏まえて、授業の主題やねらいに応じた適切な工夫改良を加えながら適切な指導方法を選択することが求められるということです。

道徳科における質の高い多様な指導方法（イメージ）

	読み物教材の登場人物への 自我関与が中心の学習	問題解決的な学習	道徳的行為に関する体験的な学習
ねらい	教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的諸価値の理解を深める。	問題解決的な学習を通して、道徳的な問題を多面的・多角的に考え、児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。	役割演技などの疑似体験的な表現活動を通して、道徳的価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。
導入	道徳的価値に関する内容の提示 教員の話や発問を通して、本時に扱う道徳的価値へ方向付ける。	問題の発見や道徳的価値の想起など ・教材や日常生活から道徳的な問題をみつける。 ・自分たちのこれまでの道徳的価値の捉え方を想起し、道徳的価値の本当の意味や意義への問いを持つ（原理・根拠・適用への問い）。	道徳的価値を実現する行為に関する問題場面の提示など ・教材の中に含まれる道徳的諸価値に関わる葛藤場面を把握する。 ・日常生活で、大切さが分かっているにもかかわらず実践できない道徳的行為を想起し、問題意識を持つ。
展開	登場人物への自我関与 教材を読んで、登場人物の判断や心情を類推することを通して、道徳的価値を自分との関わりで考える。 【教員の主な発問例】 ・どうして主人公は、〇〇という行動を取ることができたのだろうか（又はできなかったのだろうか）。 ・主人公はどういう思いをもって△△という判断をしたのだろうか。 ・自分だったら主人公のように考え、行動することができるだろうか。 振り返り 本時の授業を振り返り、道徳的価値を自分との関係で捉えたり、それらを交流して自分の考えを深めたりする。	問題の探究（道徳的な問題状況の分析・解決策の構想など） ・道徳的な問題について、グループなどで話し合い、なぜ問題となっているのか、問題をよりよく解決するためにはどのような行動をとればよいのかなどについて多面的・多角的に考え議論を深める。 ・グループでの話し合いなどを通して道徳的問題や道徳的価値について多面的・多角的に考え、議論を深める。 ・道徳的な問題場面に対する解決策を構想し、多面的・多角的に検討する。 【教員の主な発問例】 ・ここでは、何が問題になっていますか。 ・何と何で迷っていますか。 ・なぜ、■■（道徳的諸価値）は大切なのでしょう。 ・どうすれば■■（道徳的諸価値）が実現できるのでしょうか。 ・同じ場面に出会ったら自分ならどう行動するのでしょうか。 ・なぜ、自分はそのように行動するのでしょうか。 ・よりよい解決方法にはどのようなものが考えられるのでしょうか。 探究のまとめ （解決策の選択や決定・諸価値の理解の深化・課題発見） ・問題を解決する上で大切にしたい道徳的価値について、なぜそれを大切にしたいのかなどについて話し合い等を通じて考えを深める。 ・問題場面に対する自分なりの解決策を選択・決定する中で、実現したい道徳的価値の意義や意味への理解を深める。 ・考えた解決策を身近な問題に適用し、自分の考えを再考する。 ・問題の探究を振り返って、新たな問いや自分の課題を導き出す。	道徳的な問題場面の把握や考察など ・道徳的行為を実践するには勇気がいることなど、道徳的価値を実践に移すためにどんな心構えや態度が必要かを考える。 ・価値が実現できない状況が含まれた教材で、何が問題になっているかを考える。 問題場面の役割演技や道徳的行為に関する体験的な活動の実施など ・ペアやグループをつくり、実際の問題場面を役割演技で再現し、登場人物の葛藤などを理解する。 ・実際に問題場面を設定し、道徳的行為を体験し、その行為をすることの難しさなどを理解する。 道徳的価値の意味の考察など ・役割演技や道徳的行為を体験したり、それらの様子を見たりしたことをもとに、多面的・多角的な視点から問題場面や取り得る行動について考え、道徳的価値の意味や実現するために大切なことを考える。 ・同様の新たな場面を提示して、取りうる行動を再現し、道徳的価値や実現するために大切なことを体感することを通して実生活における問題の解決に見通しをもたせる。
終末	まとめ ・教員による説話。 ・本時を振り返り、本時で学習したことを今度どのように生かすことができるかを考える。 ・道徳的諸価値に関する根本的な問いに対し、自分なりの考えをまとめる。 ・感想を聞き合ったり、ワークシートへ記入したりして、学習で気付いたこと、学んだことを振り返る。		

問題解決的な学習の実践事例

- (1) 道徳性に係る事前アンケートを実施【B-(9) 相互理解, 寛容】
- (2) 教材内容と日常生活を関連付けた問題を提示する。



ポイント：教材内容と事前アンケートとのリンク

○自分が一人だけ「余り」になったら、どんな気持ちになりますか？

二人組より三人組の方が難しいなあ。

- (3) 教材に描かれた登場人物の立場や心情を捉え、自分事として考えながら問題を探求していく。



我慢するってことも時には必要なのかな。

今までの自分は、相手の立場を考え、優しくするという余裕がなかったな。

- (4) 改めて心情円盤で自分の気持ちを表現する。



○自分だけ「余り」になることに対する、今の気持ちはどうですか？

ポイント：終末で、「余り」に対する生徒自身の心情（ポジティブ・ネガティブ）の割合を心情円盤に示させ、ワークシートに記録させた。心情の割合に変化があった生徒については、その理由についても記入させた。

ここがポイント！

- 事前アンケートで見られた教材の登場人物と同様の考えを、児童生徒達の身近な問題として取り上げることで、児童生徒は自分事として主体的に考えることができます。
- 導入で取り上げた問題を、展開後段や終末において改めて問うことで、児童生徒は、学習を通して考えたことを基に、自己を見つめ直すことができ、課題に対する自分なりの納得解を導き出すことにつながります。

⑤ 道徳科における評価

ア 道徳科における児童生徒の学習状況及び成長の様子についての評価

○ 道徳科に関する評価の基本的な考え方

評価の基本的な考え方は、児童生徒の側から見れば、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものであり、教員の側から見れば、教員が目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料です。

道徳科においては、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要があります。ただし、数値などによる評価は行わないものとします。

○ 道徳科の評価の在り方

- ・数値による評価ではなく、記述式とすること
- ・個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること
- ・他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行うこと
- ・学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること
- ・道徳科の学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ること



道徳科の評価は、一つ一つの内容項目ごとに、その内容項目についてどのくらい理解したかということの評価するものではありません。道徳的価値について多面的・多角的に考えることができるようになったか、道徳的価値を自分自身との関わりで深めようとしていたかといったことを、学期や学年など一定のまとまりの中で、道徳科の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取り評価するということを示したものです。

なお、一定のまとまりの中で評価した結果として、特に顕著と認められる点が発揮された内容項目に係る授業について、評価の中で触れるということは考えられます。

○ 個人内評価として見取り、記述により表現することの基本的な考え方

道徳科において、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子をどのように見取り、記述するかということについては、学校の実態や児童の実態に応じて、教師の明確な意図の下、学習指導過程や指導方法の工夫と併せて適切に考える必要があります。



【道徳科の授業における児童生徒の評価の視点】

○ 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうか【視点】

(例)

- ・道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている
- ・自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている
- ・複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている 等

○ 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうか【視点】

(例)

- ・読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている
- ・現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目している
- ・道徳的な問題に対して自己の取り得る行動と他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている
- ・道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている 等

○ 評価のための具体的な工夫例

- ・ 児童生徒の学習の過程や成果などの記録を計画的にファイルに蓄積したもの
- ・ 児童生徒が道徳性を養っていく過程での児童生徒自身のエピソードを累積したもの
- ・ 作文やレポート、スピーチやプレゼンテーションなど具体的な学習の過程
- ・ 児童生徒が行う自己評価や相互評価 等

【評価のための工夫の実践事例】

大きくくりなまとまりを踏まえた評価の工夫の例

道徳の時間のふいかえり 年 番 氏名()	
4 よくできた 3 できた 2 あまりできなかった 1 できなかった	
① 道徳の時間、いっしょうけんめいに考えていますか	(4 3 2 1)
② 道徳の時間、自分のことをくわしく見つめていますか	(4 3 2 1)
③ 道徳の時間、自分の考えと友達の考えをくらべて聞いていますか	(4 3 2 1)
④ 道徳の時間、進んで発言していますか	(4 3 2 1)
⑤ 道徳の時間、自分の考えを書くことができますか	(4 3 2 1)
⑥ 道徳の時間、自信を持つことができましたか	(4 3 2 1)
⑦ 道徳の時間、自分のよいところや、がんばっているところに気づきますか	(4 3 2 1)
道徳の時間を終えてふいかえろう	
授業のふいかえりで一番多くえらんだ番号は	
道徳の時間でどんなところが成長したと思いますか。成長したと思うところをかきましょう。	
教師からのメッセージ	



大きくくりなまとまりを踏まえて評価をする際、毎時間の道徳科の振り返りとは別に、学期ごとや一定期間をおいた上で、道徳科の授業を振り返ることで、児童生徒は自身の学びや成長を実感することができます。

児童生徒の振り返りの質問項目を考える際は、道徳科の授業における学習活動として示されている(1)道徳的諸価値について理解する(2)自己を見つめる(3)物事を多面的・多角的に考える(4)自己の生き方についての考えを深める等に基づいて設定することで、児童生徒の自己評価を基に、指導者が自身の授業を振り返ることができます。



道徳の時間の振り返り（毎回の授業とは別に、8回毎に1回振り返りを行う）

下記の①～⑦を（4よくできた 3できた 2あまりできなかった 1できなかった）の4段階で評価を行い、各児童の課題について中・長期的な視点で対応していきます。

- ①道徳の時間、いっしょうけんめいに考えていますか・・・・・・・・・・・・・・・・(1)
- ②道徳の時間、自分のことをくわしく見つめていますか・・・・・・・・・・・・・・・・(2)
- ③道徳の時間、自分の考えと友達の考えをくらべて聞いていますか・・・・・・・・(3)
- ④道徳の時間、進んで発言していますか・・・・・・・・・・・・・・・・(2)(3)
- ⑤道徳の時間、自分の考えを書くことができますか・・・・・・・・・・・・・・・・(4)
- ⑥道徳の時間、自信を持つことができましたか・・・・・・・・・・・・・・・・(2)(4)
- ⑦道徳の時間、自分のよいところや、がんばっているところに気づきますか・・・(1)(4)

※（ ）内の数字は、道徳科の授業における学習活動を示しています。

ここがポイント！

- 児童生徒の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、児童生徒が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするためのきっかけとすることが求められます。
- 道徳性は、多様な児童生徒の人格全体に関わるものであることから、個人内の成長の過程を重視するようにしましょう。

【児童生徒の自己評価を授業改善に生かす実践事例】

児童生徒の振り返り（記述・自己評価・板書等）を生かした事例

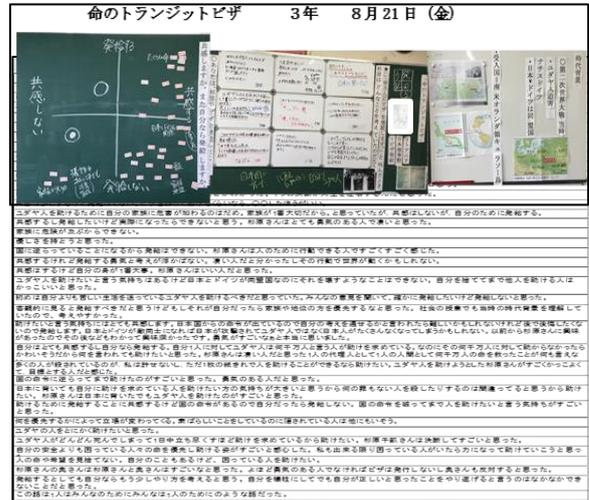
（例1）全員の授業振り返りをプリントで交流（板書付）

生徒振り返りコメントの教材化

- ①全員のコメント
- ②板書付でプリントに
- ③授業後に交流

音声入力による
教師の作業効率化

全員のコメントだから意味があります。
自分のコメント、仲間のコメントを見ることで、自己理解、他者理解へつながります。
板書を見て授業を思い出すこともできます。



（例2）授業終末の振り返り
自己評価の活用

生徒の自己評価（4観点）の活用

- ①授業の印象
- ②友達からの発見
- ③考えを深めたか
- ④大切なことが分かったか（納得解）

①～④を集約しデータで傾向を見ます。
生徒の実態把握や授業づくり、日常の指導に生かします。



（例3）学期・年間の振り返り
（印象度・ベスト3）

長いスパンで見取っていく

- ①授業実施日
- ②印象 発見 深まり 大切なこと (◎ ○ △)
- ③②の理由
- ④ベスト3 (いくつ選んでも良い)
- ⑤自由記述

生徒が今までの授業を改めて振り返り記入します。その一人一人の考えや思いを集約し、共有することで、生徒が自分と同じ見方や違った捉え方を共有することもできます。



これらの取組を生徒と教師で共有することで、これまでの道徳科の授業の成果や思考の傾向を客観的に振り返ることが出来ます。

イ 道徳科の授業に対する評価

○ 授業に対する評価の基本的な考え方

児童の学習状況の把握を基に授業に対する評価と改善を行う上で、学習指導過程や指導方法を振り返ることは重要です。教師自らの指導を評価し、その評価を授業の中で更なる指導に生かすことが、道徳性を養う指導の改善につながります。

【道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点の例】

- ア 学習指導過程は、道徳科の特質を生かし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、自己の（人間としての）生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか。
- イ 発問は、児童（生徒）が（広い視野から）多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。
- ウ 児童（生徒）の発言を傾聴して受け止め、発問に対する児童の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか。
- エ 自分自身との関わりで、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
- オ ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、児童（生徒）の実態や発達の段階にふさわしいものであったか。
- カ 特に配慮を要する児童（生徒）に適切に対応していたか。

教師は、明確な意図をもって指導の計画を立て、授業の中で予想される具体的な児童の学習状況を想定し、授業の振り返りの観点を立てることが重要です。こうした観点をもつことで、指導と評価の一体化が実現することになります。

道徳科の評価は、指導に生かされ、児童生徒の成長につながる評価にしていきましょう。



○ 授業に対する評価の工夫例

- ア 授業者自らによる評価
 - ・記憶や授業中のメモ、板書の写真、録音、録画
 - ・一人一人の学習状況を確認する手立てを用意しておき、それに基づく評価を行う 等
- イ 他の教師による評価
 - ・道徳科の授業を公開して参観した教師から指摘を受けたり、チーム・ティーチングの協力者などから評価を得たりする機会を得る 等

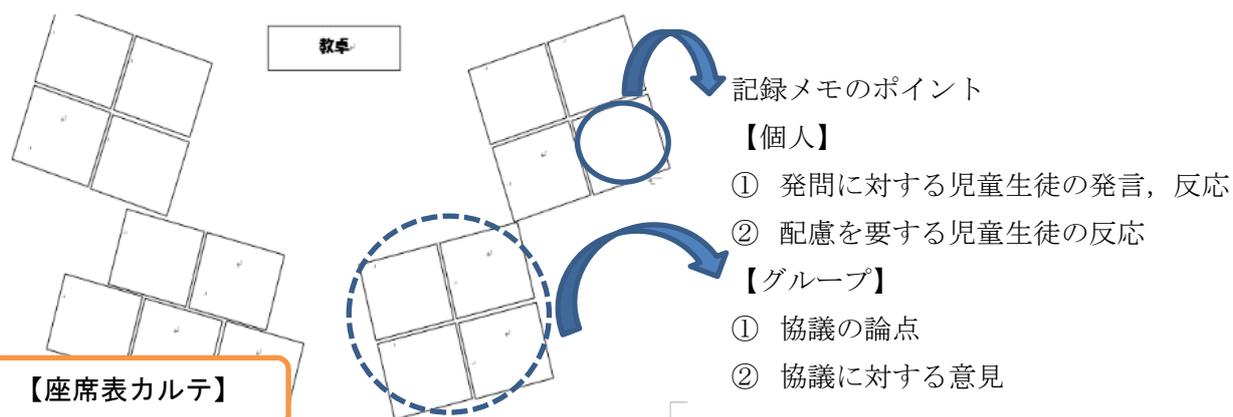
【授業評価のための工夫の実践事例】

児童生徒の記述や反応等を授業改善に生かす工夫の例

授業者自らが学習指導過程を振り返ることが大切です。

振り返るためには、道徳ノートやワークシート、授業中の記録メモ、板書の写真、録音、録画などを活用します。特に児童生徒の記述や反応は、授業改善に生かすための有効な評価の材料となります。

ア 座席表カルテを活用した児童生徒の記述や反応の記録



素早く簡単にメモできるように、記号化やマークも考えておくと便利です。

(例：自分との関わりでの考え⇒1，他者との関わりでの考え⇒2，発言⇒○など) メモには、児童生徒の発言だけでなく、表情や反応などを簡単にメモしましょう。記述など表現が苦手な児童生徒の反応は、些細なことでもメモを取っておくようにします。

『全員のメモを取らなくては！』と考えず、自分が大切だと感じた『つぶやきや反応』や、気になったことだけをメモをしてみましょう。

また、授業中にメモを取るだけでなく、授業後、記憶が新しいうちにメモを書き加えることで、授業改善につなげます。

授業改善に生かそう！

- 発言やつぶやきが特定の児童生徒に偏る場合
⇒理解しやすい教材提示の工夫，補助発問の工夫が必要です。
- 児童生徒のつぶやきを生かしていない場合
⇒指導者のファシリテーターとしての役割を見直しましょう。
- 配慮を要する児童生徒が、道徳ノート等に考えたことなどを記述できない場合
⇒配慮を要する児童生徒への言葉かけ，または，支援体制の見直しを行きましょう。



ここがポイント

- 授業改善は、まず、自分自身が日々の授業を振り返ることから始まります。
- 授業改善をしていくためには、授業者が自己評価するだけでなく、他の教師などの外部評価が有効です。児童生徒の姿や言葉を素直に受け止めて、取り組んでいきましょう。

(3) 高等学校における道德教育

① 道德教育の目標

道德教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、生徒が自己探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達の段階にあることを考慮し、人間としての在り方生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うことを目標とすること。



よりよく生きるための基盤となる道德性を育む道德教育は、生徒一人一人が将来に対する夢や希望、自らの人生や未来を拓いていく力を育む、重要な役割をもっています。生徒は、人間としての在り方生き方に関する教育の中で、小・中学校における道德科の学習等を通じた道德的諸価値の理解を基にしながら、生徒が自分自身に固有の選択基準・判断基準を形成していくこととなります。その充実のためには、学校の教育活動全体を通じて行い、各教科・科目等のそれぞれの特性に応じて、適切な指導を行うことが求められます。

② 道德教育の指導体制

各学校においては、第1款の2の(2)に示す道德教育の目標を踏まえ、道德教育の全体計画を作成し、校長の方針の下に、道德教育の推進を主に担当する教師（「道德教育推進教師」という。）を中心に、全教師が協力して道德教育を展開すること。

③ 道德教育の全体計画

道德教育の全体計画の作成に当たっては、生徒や学校の実態に応じ、指導の方針や重点を明らかにして、各教科・科目等との関係を明らかにすること。その際、公民科の「公共」及び「倫理」並びに特別活動が、人間としての在り方生き方に関する中核的な指導の場面であることに配慮すること。

ここがポイント！

道德教育は、先生方が様々な生徒とかかわる中で、日常的に行われています。したがって、すでに実践していることを生かす視点をもつことが大切です。

また、道德教育の指導体制と全体計画で求められていることは、「学校の教育活動全体を通じて、全教職員が協力して道德教育を展開すること」、「生徒が人間としての在り方生き方を考える機会を設けること」と、端的に表すことができます。

具体的な取り組みとしては、例えば、次のようなことが考えられます。

- ① 普段から先生方が行っておられることで、道德教育の全体計画にある学校教育目標や校訓に関わることを共有する。
- ② 共有したものから、共通実践できるものを複数選び、全ての教職員がそのうち一つ以上を実践する。